

## 住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の  
立場に立って設計しています。  
お気軽にご相談下さい。

# 京都建築事務所

〒 604-8083  
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10  
代表取締役社長 川下 晃正  
TEL (075) 211-7277  
FAX (075) 211-7270  
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

## 『されど相澤與一』 好評発売中！

——庶民派ですので、

少々ラディカルと見られることもあるようです

**相澤與一著** 定価 **2,000円** + 税 (送料サービス)

はじめに(無名の庶民として、幼少期のころの話、戦前の農村貧窮とファシズムの台頭、農家窮乏の歴史的意味、貧しくも懐かしい我が家)  
いわきへの移住／夜間定時制高校／東北大学学生生活／福島大学／訪英海外研修と震災／息子の病  
むすびにかえて(こころざしと援助、福島に生きて、妻・幸子への感謝)

---

【申込み・問い合わせ】 福祉のひろば E-mail : [mail@sosyaken.jp](mailto:mail@sosyaken.jp)  
TEL : 06-6779-4894 FAX : 06-6779-4895

★ホームページ(<http://www.sosyaken.jp/hiroba/>)からも購入可。

# 回復者の声を社会に伝える

回復の祭典——第4回リカバリーパレード in 横浜



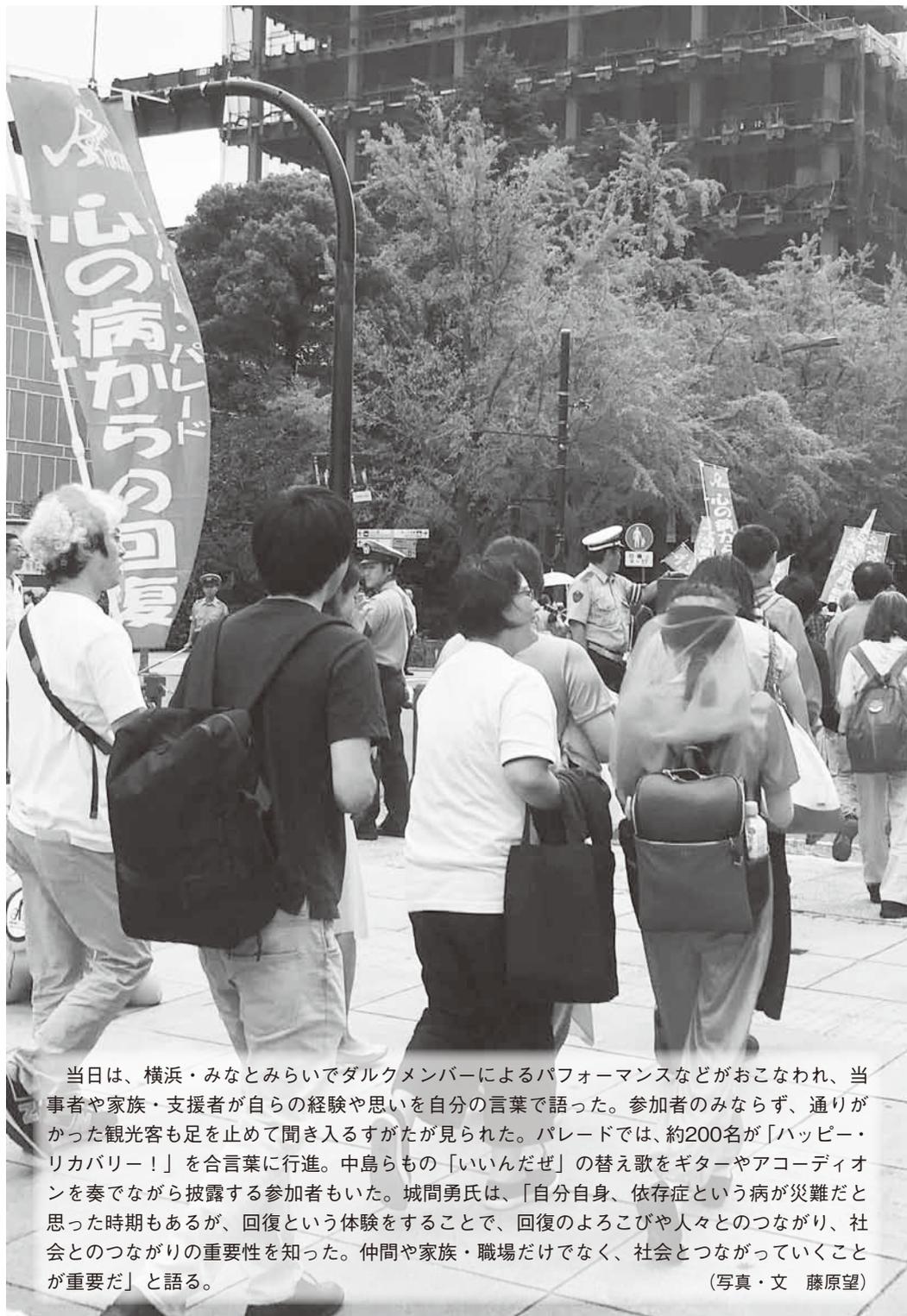
今、さまざまな依存症や心の病からの回復をつづける当事者や家族・支援者が、自らの体験や声を社会に向けて発信している。9月21日、横浜で第4回リカバリーパレードがおこなわれた。リカバリーパレードは、アメリカの回復擁護運動の影響を受け、2009年に日本でもはじまり、今年で10年という節目を迎えた。パレードの目的は、当事者が中心となり自らの声と姿を示すことで、依存症からの回復が可能であることを社会に訴え、偏見や無理解・差別をなくしていこうというものである。



2007年、依存症支援をおこなっているジャパンマックが、アメリカの回復擁護運動のメンバーで、アディクション分野の第一人者であるウィリアム・ホワイト<sup>しょうへい</sup>氏を招聘。彼は講演の最後にリカバリーパレードに触れ、次のように述べた。「依存症からの回復者・家族・支援者が東京のストリートで行進したら、日本の状況は大幅に好転するのではないか。みなさん、想像してほしい」。



この講演に参加していたアルコール依存からの回復者であり、現在、回復施設を運営する城間勇氏（1枚目写真中央）は「この言葉が心に残った」と言い、仲間呼びかけた。2009年の夏に計画を立て、12月に準備会や実行委員会を立ち上げ、アメリカの回復月間である9月に合わせて、2010年9月23日に日本ではじめてのリカバリーパレードをおこなった。このときは300人以上が東京の新宿中央公園に集まり、どしゃ降りの中を行進した。これ以降、東京につづき、広島や大阪でもリカバリーパレードがおこなわれるようになった。



当日は、横浜・みなとみらいでダルクメンバーによるパフォーマンスなどがおこなわれ、当事者や家族・支援者が自らの経験や思いを自分の言葉で語った。参加者のみならず、通りがかった観光客も足を止めて聞き入るすがたが見られた。パレードでは、約200名が「Happy・リカバリー！」を合言葉に行進。中島らもの「いいんだぜ」の替え歌をギターやアコーディオンを奏でながら披露する参加者もいた。城間勇氏は、「自分自身、依存症という病が災難だと思った時期もあるが、回復という体験をすることで、回復のよこびや人々とのつながり、社会とのつながりの重要性を知った。仲間や家族・職場だけでなく、社会とつながっていくことが重要だ」と語る。

(写真・文 藤原望)

## 【ひろばトーク】

踏まれても踏まれても、跳ね返す力を 森 茂輝 6

# 福祉のひろば

2019年12月号

### ●特集● “ひきこもり”とその支援をみつめて社会のあり方を問う

スタートは生きる“意欲”をもつこと 泉 翔 11

問題は個人ではなく社会のしくみにある 鈴見咲君高 17

一人ひとりの困りごとに向き合い、可能性に目を向ける  
藤原 望 21

委託事業の運営にたずさわるなかで感じるむずかしさ  
石田 泰二 25

【討論】泉/鈴見咲/藤原/石田/申/加美 29

「8050問題」と社会福祉の課題 山本 耕平 34

### ●トピックス●

【PHOTO】地域福祉まつり 40

塗りかえられている戦争の記録と記憶（その2）塩見 一弥 44

台風19号・豪雨災害レポート 46

第24回合宿研究会のご案内 49

二度目の宮古島市 そこには こんな歴史もあった  
下野 祇園 50

「特定処遇改善加算」に関する声明を出しました 堤 昭子 56

### ●連載●

阿修羅がゆく

わたしが好きな釜ヶ崎（5） 水野阿修羅 62

相談室の窓から

M子さんの“心のしんどさ”（2） 青木 道忠 64

育つ風景

こんなにせつない“おかあさん、大好き” 清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

歯科技工士を辞めてろうあ運動一本へ 清田 廣 68

映画案内

『空飛ぶタイヤ』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

台東区の避難所での野宿者排除と繰り返されるヘイトスピーチ  
生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

ブームに乗っかるのじゃ～！ ラッキー植松 74

ホームレスから日本をみれば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●  
神門やす子



みんなのポスト 60 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● 回復者の声を社会に伝える 回復の祭典

——第4回リカバリーパレードin横浜

# 踏まれても踏まれても、 跳ね返す力を

森 茂輝さん

私は、一九七〇年四月に大阪府社会福祉協議会（社協）に就職しました。この時代は薄給で、社会福祉の仕事を支えらぶ同級の士はほとんどいませんでした。民間施設の職員は全国各地のツテを探して集め、結婚後は共働きでも生活が苦しい方も多くいました。

当時、大阪のまちは公害で汚染され、空気がとても臭かったように記憶しています。一九七〇年は大阪万博が開催された年で、みなが浮かれていたように今では思っていますが、大阪府民は決して浮かれておらず、「公害知事さんさようなら、憲法知事さんこんにちば」を合言葉に、一九七一年、黒田革新府政が誕生したのです。

東京・大阪で民間の社会福祉法人経営者と労働者が大同団結し、「民間の社会福祉に働く労働者にも公務員と同じ給料を」と公私間格差是正の制度が実現しました。しかし、最終的にはその制度は全国的な運動につながらず、残念ながら廃止されてしまいました。

社協では障害者の団体、母子家庭の団体などとの交流を通じて、その後の生き方を学びました。阪神淡路大震災のときはボランティア活動が再認識されましたが、もっとむかし、一九五九年の伊勢湾台風でおおきな被害を受けたときには、福祉関係者はもっとがんばったのだと記録されています。今回の台風災害は他人事とは思えません。

最近、社会福祉の世界でも資本主義経済の論理がどんどん幅を利かせ、いったん勝ち取ってきたものが少しずつ剥ぎ取られ、後退しているかのような錯覚と挫折感を、愚かにも感じて



## もり しげき

1946年6月21日生まれ。元社会福祉法人大阪府社会福祉協議会職員。元社会福祉法人療育・自立センター理事。

現在は、社会福祉法人大阪福祉事業財団監事、社会福祉法人さんすまいる監事、社会福祉法人宮の里福祉会理事長をつとめる。

しまいます。消費税も3%からはじまり、いまでは10%にまでなり、選挙は中選挙区制から小選挙区制になり、民意が政治に反映されなくなったのが口惜しい。

「こうあってほしい」とねがう気持ちとは真逆の方向に、日本の政治が動いているのが残念です。しかし一方で、世界的には若者の貧困が深刻さを増し、貧富の格差が目に見えるほどに広がり、マルクスや社会主義の思想が世界の若者に共感を呼んでいると聞きます。

社協を退職したあと、福祉作業所の仕事に関わったのですが、障がい児者をもつ親の願いに応えようとした自分がいたと思います。重い障がいをもつ子の父母が、自らの資金を集め借金をし、学卒後の通所の受け皿となる生活介護の通所施設を立ち上げられたことに思いがけず触れ、社会福祉事業の原点の世界を見た思いがします。二〇〇五年の障害者自立支援法で、原則障がい者の自己負担を一割とする応益負担がスタートしたときは、生まれながらにして重い障がいを抱えた者はその負担一割を一生涯負わなければならぬのかと涙したのですが、関係者のがんばりで跳ねのけることができた経験も大きいと思います。

人の心をもたないように思える政府に抗して、これからお互いがんばりましょう。社会福祉を進めてきた先人の歴史は苦難の連続だったのです。踏まれても踏まれても跳ね返す力は、国民の側にあります。笑顔で語り合える日を夢見てがんばってください。私も老身にむち打ち、少しだけですががんばろうと思っています。

# ひきこもりとその支援をみつめて 社会のあり方を問う

ひきこもりは、海外でも「Hikikomori」と日本語で紹介されるなど、これまで日本特有の問題だと考えられてきました。しかし近年、ひきこもりは日本だけの問題ではなく、欧州や韓国などの先進国をはじめ、発展途上国でも社会問題になりつつあると言われています。

自身も三〇年以上断続的にひきこもり状態をくりかえしながら、堪能な語学力を生かして海外のひきこもりの人たちにネットインタビューをおこない、雑誌『ひきボス』（ひきこもり当事者の声を集める雑誌）などで紹介している、ぼそつと池井多さん（活動名）。

池井多さんは、ここ数年、フランスやイタリアでも大手メディアが国内のひきこもりについて報じ、イタリアでははじめて関係者が集まる全国大会も開かれた、と話されます（オンラインメディア「AERA dot.」二〇一九年八月四日）。

二〇一二年ごろからフランスでひきこもりの実態調査をおこなっている、名古屋大学の古橋忠晃<sup>ただあき</sup>教授（精神医学）は、朝日新聞の取材に、ひきこもりは「日本だけの問題ではありません。フランスでもこの数年、爆発的に事例が増えています。パンデミック（大流行）とも言えるレベルですよ」と応じています（『朝日新聞デジタル』

二〇一九年三月三〇日）。

日本では、約二〇年前に「KHJ全国ひきこもり家族会連合会」が設立されました。当初、ひきこもりは若者特有の問題とされ、二〇一五年に内閣府が実施した調査では、一五～三九歳の若年ひきこもりが五四・一万人と推計されました。その後、ひきこもりの長期化、中高年のひきこもり、「八〇五〇問題」などが注目されるなかで、二〇一八年に内閣府がおこなった調査では、四〇～六四歳のひきこもり状態の人が、全国に六一・三万人いると推計されました。

より視野を広げると、ひきこもりは社会的孤立のひとつの状態と捉えられます。二〇一八年にはイギリスで孤担当大臣が新設されるなど、孤立・孤独が社会問題になっています。ひきこもりや社会的孤立が世界的に増えているという現実、それだけ「生きにくい社会」が世界的に広がっているということではないでしょうか。

前出の「AERA dot.」で池井多さんは、「ぼくがひきこもったのは、社会がそこまで苦勞して適應するに値しない空っぽの世界だという認識に至ったからだ」と話したフランス人の男性(二二)のことはを紹介しています。しかし同時にその男性は、「社会の中に自分の居場所を獲得しなかった」とも語っています。

いまの日本のひきこもり支援は、就労自立が大きなキーワードになっています。もちろん、生きがいややりがいを感じ、ともに生きる仲間を得て、自らが望む生き方の糧となる就労であれば、それはひとつのゴールになり得ると思います。しかし、とくにひきこもり状態にある人たちがめざすべきとされる「就労」は、そうした位置づけになっているのでしょうか。

今号の特集では、ひきこもりの当事者と支援者にご参加いただき、ひきこもりを考える研究会を開催しました。『ひきこもり』の問題を考えるとき、その当事者や家族の支援と同時に、いまの教育のあり方、就労のあり方、社会のあり方についても考えざるを得ないことが浮き彫りになったと思います。

(編集主任)